

角川総一の 金融 60 逆さメガネ

F P試験等にもときどき出題される「GDPと景気動向指数の違い」について。ともに景気動向を総合的に示すデータとして知られる指標だ。しかし2つのデータの間には決定的な差がある。例えば以下の設問は正しいだろうか？

「景気動向指数は景気の強弱感を端的に示す指標である」
各種セミナーではこの手の問題を解いてもらっておひらき、とすることが多いのだが、まあ大雑把に言っただけの設問に対して「これは誤り」と自信を持ってお答えになる受講者は1割もない。ほと

第49回

景気拡張期間ばかりを強調し 成長率を問題にしない不思議

「景気回復期間はもう一歩で過去最長」と、とにかく今は景気がいいと主張する論者は多い。確かに期間は過去最高だが、成長率が伴わないことに気づくべきだ。

正解は「X」。なぜなら、毎月内閣府が発表する景気動向指数

（先行系列12、一致系列11、運行系列8つから成る）は「景気の方角性」を示すものの、「景気のエネルギー」を示すわけではないから。つまり、この指数が40の時より80の時の方が景気のエネルギーが強いわけではないのだ。なぜなら、この指数は（3カ月前に比べて）景気の拡張を示しているデータが全体の何%あるかを示すこととまるから。すなわち、極端に言えば、3カ月前に比べてすべてのデータが0・01%分景気拡張を示していた場合でも、この指数は100（最大値）になる。しかし、この100は景気エネルギーの強さを保証するものではない。これに対して、数値の大小が直ちに景気のエネルギーを示すのが例えばGDP（国内総生産）データであることは容易にお分かりいただけると思う。

「いざなぎ景気を抜く」に感じる違和感
昨今、株価の急落にも関わらず

「それでも日本の実体経済はまだまだ強い」とする論者が多いが、そのうちの少なからぬ人が「今年11月でわが国の景気拡張期間は戦後最も長かったいざなぎ景気（57か月間）を抜く」という。実際、（そうではない論者も）スワ「わが国は戦後最長の景気拡張を示すのはまず間違いない」という。

2002年1月からスタートした現在の景気拡張が今年11月まで続けば、1965年10月を谷に70年7月まで続いた「いざなぎ景気」を抜くのは事実だ。

ところが、私にはこの手の主張にどうも違和感がある。それは、期間の長さだけが強調されるのに対して、その内容が同時に紹介されたことを思い出してほしい。エネルギーと方向性は違うのだ。「いざなぎ景気」とか、「岩戸景気」はいずれも景気の方向性とその期間を示すに過ぎない。なぜならこれは主に景気動向指数を最も有力な参考データとして内閣府が事後的に判定するものだからだ。

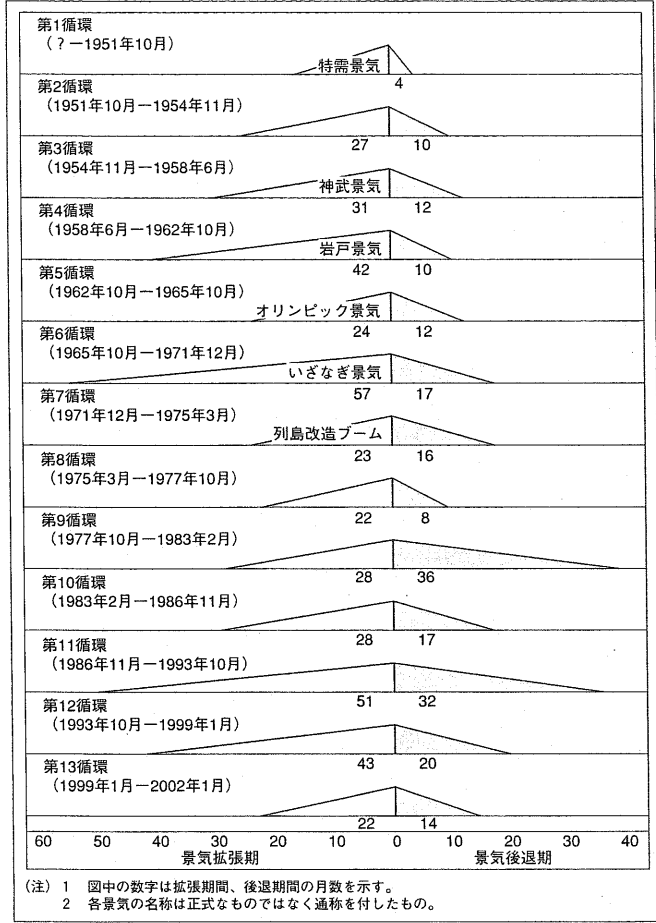
景気の拡大局面をエネルギーと比較してみると
さて、ではわが国の戦後において景気拡張期間が長かった順に3つの局面と、現在のわが国の景気拡大局面とを、そのエネルギーで測ってみればどうなるか？ 図表

2が示すとおりだ。ここではそれぞれの景気拡張局面の景気のエネルギーをGDPで測ってみた。これによると、現行の景気拡大は今年3月までで計測する限り、景気拡張が始まった2002年1〜3月期のGDPを基準にすれば1・1倍になったに過ぎず、年率

2・4%程度の成長率にとどまっているのだ。一方、「いざなぎ景気」の時代は成長率11・5%。全く問題にならないのである。情報は常にある種のバイアスがかかっている。意図しうがしまいが、寸分たりとも回転しないように野球のボールを投げるように

至難の業であるように。ただ私の目から見ると、「とにかく今は景気がいいんだ」とことを主張したい（印象づけたい）論者によって「景気拡張期間、もう一歩で過去最長を記録」ということが強調され過ぎていように思えるが如何？

図表1 戦後の景気局面



図表2 過去の景気拡大局面と今回のそれを比較する

	いざなぎ景気	第11循環	岩戸景気	今回
スタート時	1965年10月	1986年11月	1958年6月	2002年1月
エンド時	1970年7月	1991年2月	1961年12月	(2006年3月現在)
期間	57カ月	51カ月	42カ月	50カ月
スタート時のGDP (四半期ベース)	113兆7967億円	380兆6478億円	57兆7886億円	499兆0643億円
エンド時のGDP (四半期ベース)	191兆0902億円	475兆1915億円	83兆7823億円	550兆1651億円
GDP伸び率(倍)	1.6796	1.2484	1.4498	1.1011
四半期平均伸び率 (前期比ベース)	2.77%	1.31%	2.69%	0.60%
四半期平均伸び率 (前期比年率ベース)	11.55%	5.34%	11.20%	2.42%